

## 第2期第17回生涯学習センター運営協議会 議事要旨

〔日 時〕 2015年11月30日（月） 10:00～12:00

〔場 所〕 町田市生涯学習センター 6階学習室2

〔出席者〕 ※敬称略

委 員：石川清（会長）、井手伊澄、岩本陽児、小川久江、押村宙枝、貝原俊明、佐合昭浩、富川尚子、西原要四郎、布沢保孝、二見秀太郎、柳沼恵一、吉川雅子 以上13名

事務局：稲田センター長、鈴木担当課長、松田事業係長、小林管理係長、高木担当係長、村田担当係長、小山主事（記録）

〔欠席者〕 太田美帆、辰巳厚子

〔傍聴人〕 2名

〔資 料〕 ・第17回生涯学習センター運営協議会レジュメ

- ・市民大学「地域を育てる」のゴールについて（前回運営協議会から抜粋）（当日資料）
- ・市民大学を見学して感じたこと、気づいたこと（第15回運営協議会意見抜粋）（資料1）
- ・市民大学の検討事項（当日配布）
- ・2015年度生涯学習センター事業 企画書 資料1～8
- ・2015年度生涯学習センター事業 企画書兼事業評価シート 報告1～12
- ・東京都公民館連絡協議会の活動について 報告1～12
- ・2015年度生涯学習センター運営協議会 事前提出意見（当日配布）
- ・町田市における生涯学習の進め方について-答申-（当日資料）
- ・生涯学習審議会報告（当日資料）
- ・第56回関東甲信越静公民館研究大会兼第52回東京都公民館研究大会（当日資料）

### <市民大学について>

会 長：前回協議会抜粋資料「市民大学「地域を育てる」のゴールについて」が事務局から出ているので、まずは事務局からご説明いただきたい。

事務局：前回協議会では、市民大学のコンセプト「あなたを励まし地域を育てる」の「地域を育てる」部分のゴールに幅があるという話で終わっている。資料は『「地域を育てる」とはどういったことなのか』に関して、前回協議会の意見を抽出している。「地域を育てる」といっても様々な捉え方があり、しくみの話なのか、例えば学習したことを自宅で家族に話すことでも地域に広めたことになるのかなど、どういった部分を「地域を育てる」と考えて、どこまで市民大学で実現していくのかを本日はご議論いただきたい。

会 長：まず、「地域を育てる」というのは、非常に大きな課題を持っているなかでもどこを取り上げてゴールにしていくのか、ご意見をいただきたい。特に、「地域を育てる」は生涯学習センターにおける大きな問題であるが、学校教育との関りの中でどのように捉えていくのかを、小・中学校校長会代表である委員のお二人にご意見をいただきたい。

委 員：やはり学校が地域の核となるというのは大事な点である。しかし、学校に足を運んでくださる方、そうでない方がいるので、地域への広がりという部分では若干弱くなるとも感じるが、地域への発信源として学校を活用していただくとありがたい。子どもたちの学ぶ場なので、なかなか大きく開放と言えないが、公共施設を利用して「学びたい人がすすんで学べる場」として提供するのが、大切なことではないかと考える。

会 長：学校教育を受けている生徒が、生涯学習の場にどのように関わっていくのかを、どのようにお考えか。

委 員：子どもたちにも勉強だけで目一杯という子と、進学を重点に置いている子がいるなかで、学校教育以外の学習への取り組みは現状では時間的に厳しい。今後の課題である。

委 員：中学生はとても忙しく、ましてや郊外にある中学校は、生涯学習センターに来るまでが大変な距離で足を運んで学習を行うことは非常に難しい。ただ、中学校教育でなかなか補えないプログラムである「浴衣の着付け教室」などは、興味深い。「市民大学のゴール」という点でいう

と、やはり児童生徒からはかけ離れたものであると感じる。前回「市民大学のゴールの設定」という話があったが、そもそも設定をすることは難しいのではないかと。受講される方一人ひとりにゴールの設定があり、こちら側が設定して「ここまで行きなさい」と言うものではないのではないかと。もう一つは、町田市以外の地域で市民大学などをやっている自治体があれば、情報を集めてみるのも手ではないかと。

会長：生涯学習という大きな括りの中に学校教育があるという有り方について、どのように考えるかお聞かせ願いたい。

委員：文部科学省が出来た時に遡る。生涯学習政策局を作り、生涯学習の下に学校教育も社会教育も置く制度設計になった。’90年代には地方教育や行政レベルで、社会教育が生涯学習と看板を変えたようである。以降、社会教育が生涯学習として動いていることが多々見受けられる。学校教育で日頃忙しい生徒たちも実はそれが生涯学習の一部であり、卒業した後も自発的に学ぶ生涯学習の機会もある。そのような生涯教育の種のようなものが、学校教育の中で埋め込まれていくと素晴らしいことだと思う。

会長：なかなか、その点が生涯学習センターの事業にうまく組み込めていない。一方、幼児分野でうまくいっているのは、学校教育との接続部分が恐らく根底にあるのだと思う。市民大学のゴールの設定という点で、学校教育との関りが抜けていたので、今回は取り上げさせてもらった。

委員：市民大学の参加者に、個人のゴールがあるのは確かである。しかし、修了後に一歩先に行きたいと思った時に、「自分でゴールを設定して地域に広げて下さい」というのは難しいのではないかと。学ぶことと、人に教えることや地域に広げるとは、大きなギャップがあると思う。例えば「生涯学習センターってなにをするところ？」という講座を、各地域の市民センターで行い、市民大学の講座紹介を行って欲しい。一人のスピーカーが「こんなことを学びました」と10分程話す機会を作ってはどうか。学んだ人は人に伝える練習になり、地域の方に市民大学の学びを知っていただく。そういった機会を幾つも重ねる中で、お互いにグループを作ろうという動きが出来るのではないかと。細かい仕掛けを用意しておかないと、「市民大学を修了しました」「次に広げましょう」と言うだけでは難しい。ステップの1つとして、歴史を学んだ方に「町田市にはこんな歴史があるよ」とか、自然や環境を学んだ方たちに「町田市の緑はこうやって守るべきだよ」という話を小学校にしに来ていただくなど、地域に広げるチャンスは沢山あると思う。私たち学校支援コーディネーターが学校に関るなかでも、中学校と小学校のコーディネーターでも考えることが全然違うことはある。中学校のコーディネーターは、学力のギャップを埋めることに奔走せざるを得ない状況だが、小学校は体験的な学習をする余裕があるように感じる。小学生に話すということは、理解できる内容に噛み砕いて説明する必要がある。そういった体験を積み重ねる中で、自分が学んだことを地域に広めるとはどういったことを考える機会ができるのではないかと。小学校側には、設定の仕方ですべての学びを活かすチャンスがあると思う。市民大学で学んだことを、どういう風にすれば小学校に持っていけるのかなどは、学校支援コーディネーターにご相談をいただきたい。二点目は、学校生活がしんどいという子に、学校教育が全てでないことを見せることができるのではないかと。子どもたちはいつも目の前の受験などしか見えてないことがあるが、学校教育の中で鬱々としている子が生涯学習を学び人生の広がりや学校の勉強にも役立つことを知ることで、学校生活が豊かになるということもあるのではないかと。

委員：学校との連携が、できていないのではないかと。

委員：市民大学の修了生のうち、登録した方をコーディネーターが探して学校で活躍するような方法はあるのだと思うが、現在は大変難しい。

委員：もっと入りやすい道があったら、それを示すというのも一つではないかと。

会長：今回市民大学を見せていただいて、自然や環境講座などはエキスパートを目指す人をサポートするプログラムは充実しているが、初めて学ぶ人もいます。学ぶ人の習熟度にギャップがあり、このまま続くのかという疑問も感じた。つまり、「地域を育てる」を担う人の中にも様々なレベルの方がいて、それぞれに目的を持っている中で、協議会の終着点を自分なりに数ヶ月考えていた。市民大学講座や公民館事業などが統合されて4年間が経った。この先は、大きな視点で複合的に「生涯教育」として1つのコンセプトを持ちやっていくべきであり、企画毎の目的

よりも大きな枠組が必要になっていくのだろう。そう考えると、「あなたを励まし地域を育てる」というコンセプトは非常にいいコンセプトで、カルチャーセンターとは異なり今までの公民館とも違った新しい道として良いものである。ここからは、私の提案であり皆様にご意見をいただきたい。「あなたを励ます」と「地域を育てる」を分解して、一人ひとりが自発的な学習をする場としての「あなたを励ます講座」と、学んだ人が地域に戻って活躍していただくための「地域を育てる講座」として、生涯学習センターとして2つのゴールを目指すやり方であっても良いのではないかと感じる。その中でも、「地域を育てる講座」は、知識や学びの程度でレベル別のプログラムを設ける。今までのプログラムを生涯学習という中の大きな枠組みのなかで、捉え直して行く事が必要だろう。3月までに市民大学のあるべき姿を、生涯学習の中でどのように位置づけられるかをまとめていきたいと感じている。

委員：押村委員に質問だが、コーディネーターの立場として、市民大学の現在のプログラムから修了生に来ていただきたいと思う子どもたちに展開できるプログラムはあるか。

委員：歴史講座は担任からもニーズがあり、薬師池周辺の歴史や戦争や国際平和について聞きたいという話もある。また、6年生で国際社会について学ぶので、国際関係を学んだ方からお話が聞ければ、リアリティのある学びができるかもしれない。また、子どもたちを担任の先生が近くの間で春を探しに連れて行っても、なかなか見つからない虫が、自然学を学んだ人が一緒にいくと見つかったりすると思う。出番は色々考えられると思うが、学校の現場では急なオファーも多いので、あらかじめ、登録などして急ぎでも対応いただけるようなネットワークがあるとすごく助かる。具体的に講座を見ながら、こういう講座からこういう人が来てくれたらという考えはいくらでも膨らむ。

委員：しかし、小・中学生も忙しいので、その中でこういった展開をするかを考えなくてはいけない。私がお手伝いしている学校では、車椅子体験をして実際に高齢者や福祉施設に見学に行っている。具体的に実施するとなるとびっしり詰まっている学校のスケジュールの中で、どこに織り込むかが非常に難しいと感じる。

委員：いきなり学校に行って1コマを任せるといって、初めての人は頭が真っ白になって立ち往生したり、内容が難しすぎて子どもにうまく通じず両方が困ってしまうこともある。学んだことを地域に広げるために話すことや表現することをお互いに学びあうような講座があれば、安心してお願いできると思う。

会長：我々は学校教育にいかにか、生涯学習センターが寄与できるかという視点を持っていると思うが、逆に学校教育の中で出来ないことを生涯学習センターに求める需要と供給があるのか、小・中学校校長会代表のお二人に改めて伺いたい。

委員：やはり森や公園に行っても、目の付け所や価値は教員に知識がないので、専門家から話が聞きたい。しかし、専門的過ぎても子どもたちは理解できず飽きてしまう。また、自分の知識をひけらかそうとされても困る。子どもたちのレベルに噛み砕いてご説明していただくと共に、事前の打ち合わせを充分にして的を絞った内容にしていただく。また、子どもたちの質問に対して優しく答えてくれる方に一番のニーズがある。

委員：中学校のニーズで言えば、1点目は、放課後の補習学習や休み期間の学習補助のお手伝い、2点目は部活動の支援である。専門でない者が管理顧問に就いていることがあるので、専門的なご指導がいただける方。この2つが大きなところだが、若い世代が良いという傾向もある。ついこの間「自分はこれを乗り切ったよ」という経験を持っている若い人達の話のほうが、中学生には馴染みやすいようである。

委員：小・中学校の話になっているが世代間交流と言う意味では重要だが、市民大学というテーマでは少し違う観点でみるべきではないかと思う。利用者交流会企画でやっている「生涯学習センターってなにをするところ？」という講座は、すごく良いテーマである。しかし、スローガンは良いが、どこに向かって動くのかという未来への方向性が見えない。他市区町村を見ると非常に良い事例が沢山あり、目を向けなくてはいけないと感じる。例えば、板橋区は財政的に弱い区であるために「知恵と工夫で未来の板橋区をどうするか」と考え、100程のボランティア団体と公民館がつながって未来会議というものをやっている。既に100回以上開催し、市民が向かうべき方向性を話し合っている。町田市ではお互いに気づき合おう、育て合おうと言っている。

るが、生涯学習センターはどこに向かうのだとか、町田市の子の代まで良い社会を作るためとか、方向を出さないといけないのではないかな。また、国立市は地域の中に問題を見つけるようにしている。現在地域の中に抱えている様々な課題をはっきり見つめた講座作りをして、意識付けや考えさせる工夫をすれば市民も動き出すと思う。地域課題とリンクした内容として市民大学で一番フィットするのは、福祉講座である。地域課題と講座内容を最初から関連付ければ、地域への展開に繋がって行くものだと思う。他市区町村でも色々な事例があるので広い視野で考えなくては目先の問題だけを捉えた市民大学になってしまう。また、先程の話にもあったように、学んで理解したことを表現する場を作っていくということは、学習と行動をどうやって結びつけるかを考えることだと思うので大賛成である。しかし、世代間交流は必要だが、町田市で抱えているのはシニア人口増加の問題であり、どう救うか、さらに子育てや若者たちの世代をどう繋ぐか、ターゲットをはっきり理解して市民大学を考えたらいかがだろうか。

委員：先程、会長から「あなたを励まし、地域を育てる」を別々の講座にする意見があったが、賛成である。理由は、私が修了生団体を立ち上げたのが2006年頃は講座担当者が一生懸命に地域を育てることに尽力して下さり、修了生は皆団体やサークルを立ち上げていた。しかし、年数が経つにつれ高齢化でメンバーがいなくなっている。私の記憶では市民大学の集いが2008年を最後になくなっていて、それ以降、修了生団体の立ち上げがそれまでの半分以上になれている。なぜかと思っている時に、生涯学習課と公民館と統合された生涯学習センターができ、さらに指導性がなくなってきた。現在では修了生団体もサークルも作りにくくなっているが、「この講座良かった」「この講座から、サークル作ろうか」という相談も私の下にあり後押ししたいと思っている。「地域を育てる」講座を実施するには、そのためのコーディネーター機能や能力が必要になってきている。それらが、クリアできれば押村委員がおっしゃっているような地域への展開は楽にできるのではないかな。

委員：「あなたを励まし」と「地域を育てる」を別々ではなく、同時進行的に展開すると良いのではないかな。市民大学で学び、さらに広げようという意欲のある人には広げ方の講座がワークショップがあると良いのではないかな。例えば、歴史を学んだ人が修了後に歴史を勉強するグループを作りましょう、福祉を勉強した人がこれからも福祉のことを考えていこうとグループを立ち上げましょうとなると、小さなピラミッドが沢山できてしまう。そうではなく、歴史や福祉を学んだ人も皆が集まり地域の中で、学んできたことで何ができるだろうかと考えるなど色々な分野の人達が集まったグループがあったほうが、学校支援コーディネーターとしては活用しやすい。横断的なグループ展開ができると良いと思う。

会長：各論、総論を繰り返しているが、ここで2012年の諮問を受けた2013年の「町田市における生涯学習の進め方について-答申-」の当日資料と絡めて、町田市生涯学習審議会について今年度の状況を含めて、お話を伺いたい。

委員：お手元の当日資料は前回の答申である。2012年8月1日付の諮問では「町田市教育プラン」が既に始まっていて、後半にあたる事が書かれている。この時は町田市が全国的に注目を集めるような意欲的な答申を出して欲しいという話があり、町田市の生涯学習が学校教育も含んだ大きな屋根として、社会教育と学校教育を取り込んだ制度設計の提案をしたところ、10年間の教育プランの中に既に入っているから大きな制度設計はできないということであった。その後2年経とうとしているが、現在はこの次のバージョンの答申の作成を進めている。もう一点、当日資料として「生涯学習審議会報告」が出ているが、前回9月の生涯学習審議会定例会のメモである。会議としては、7月末の定例会後ボランティアベースで自主グループの調査活動を2回行った。まず、町田市民文学館の視察を兼ねて打ち合わせを行った。その後9月に相模原市のユニコムプラザという施設の見学をしたが素晴らしい施設であったが教育委員会と繋がっていないことがわかった。以降、10月11日と会議を行ってきた。現在、生涯学習審議会としては、次の答申を出すのがミッションであるが、前回から2年しか経っていないので新しいことは言わず、前回の答申が網羅的だったという反省もありメリハリをつけた内容にしていきたいということ、さらに藺田会長からはもっと市民や行政に読んで頂きたい、見せ方も面白くビジュアル的なものを作ってはどうかと話されている。次回答申の最終の落としどころとしては、6つの項目に関する宿題を委員が貰っているところである。まず生涯学習とはなにか

を市民にわかってもらうこと、2点目は地域の課題の解決に関わる生涯学習ということを強調したいということ、3点目は学んだ人を地域の現場で活かしていく、人と地域を結びつける仕組み。4点目は、町内会、自治会、地区協議会、NPO、大学、市民団体を生涯学習の元に繋いでいくこと。5点目は、学校の抱えている問題、地域と学校の繋がりを強化する課題。6点目は生涯学習公共施設の連携とあり、生涯学習センターに期待されているのがわかる。役割を点検したいということである。また、福祉健康の公共施設を再活性化させるかとあり、生涯学習を福祉健康の領域に伸ばしていこうという意図がある。それから生涯学習センターが中心機能を果たすためにはどうしたらいいのかという宿題が課せられている。協議会委員の皆様にもお知恵を拝借いただきたい。

やはり、学習を学習に終わらせない地域での成果と言うのか、学んだことによって地域が変わっていくというのが、一つのポイントになるかと思っている。今までと違うものを生み出す学びというものがあるのと面白いのではないかと思っている

委員：6つの項目で述べられていた4点目の町内会、自治会、地区協議会、NPO、大学、市民団体を生涯学習の元に繋いでいくことは本当に大事な事であるが、「まず、分担して作る」資料に記載されているが意味合いとして誰がどのような分担をするのか。

委員：委員のメンバーが2人ぐらいのペアーになり、それぞれの項目でたたき台を出すというニュアンスであったと思う。

会長：「地域を育てる」のゴールは、社会も政治も思想も移り変わり明確に設定するのは難しいなかで、共通のゴールを探さなければならないと感じている。また、岩本委員から伺った生涯学習審議会の現在の状況では、新たな答申作成では前回答申から改革や反省点はどこにあったかを伺いたい。

委員：前回答申によりどの程度政策に反映されたのか、どういった点が不十分なのかは委員からも出された部分である。しかし、10年計画の町田教育プランのうちの5年が経過したところであるので次の手を考えるというよりも、中身の肝の部分のアピールしていこうという流れにはなっている。

委員：文章の羅列ではなく、インパクトが伝わるようなものにしようという点がすごく良いと思う。

委員：「ゴールの設定」についてだが、受講者それぞれの習熟度や環境でも変わってくるので、大学のように一定のカリキュラムを修了したら卒業というのとは違い、設定するのは難しいのではないかと。やはり、地域を育てる人を育てていきたいという開催側のゴール設定は良いことだと思うが、受講生側のゴールを決めることはできないのではないかと。今までのように講座の開講を一律に並べて全員が同じ目標を持って学習するという講座は難しいと思うので、「あなたを励まし」の部分が重点的になる講座があっても良いし、さらにステップアップして「地域を育てる」点に必要な講座を受講生にも目に見える形でオープンにし意識を持って受けて頂く、その中でもスキルに差があるので地域に出て活躍したいと思う人向けにステップアップ講座を、今までの従来講座に加えた枠組みを作っていくことも必要かと思う。押村委員がおっしゃったように、市民大学自体も地域性がある課題の講座については、地域での開講もあると思う。目標、ゴールを変えるのではなくて、やり方を少し変えることで少し違う方法も出てくるのではないかと。

委員：私が考えたゴールについて、お話したいと思う。「地域を育てる」の意味合いについては、前回辰巳委員のご指摘あったように、①コミュニティの再生、創造②活動へつながる市民性を養う③市民協働に参画するというステップがある。まさに、市民活動のゴールだと思うが、市民大学の「地域を育てる」のゴールとは異なるものだと思う。市民が最終的にどういうゴールを目指すか、それを市民大学がどのぐらい手助けができるか、そこに市民大学のゴールがあると思う。だから、①コミュニティの再生、創造を取り上げるなら、受講中に受講生間の意見交換をすることにより、コミュニケーションが語れる人間関係を作ると言うのが大事だと思う。それこそ市民大学にやるべきことだと思う。②活動へつながる市民性を養うは、やはりグループ活動は一人だけでは何も出来ないもので、グループを作ることによって威力を引き出すような講座を作ること。③市民協働に参画するというステップという意味合いでは、行政、大学、NPO、地域組織について理解し情報を提供することも市民大学の使命だと思う。地域活動を活性化し地域

を変えていくのは市民だが、生涯学習センターはそれをバックアップし伴走する姿勢が必要だと思う。そういった目標を達成するために何が必要かということで、自分の身近な周りの生活と地域課題を繋ぐような講座のテーマ設定をまず行う。また、受講生同士の意見交換の場を保障する。さらに、自ら問題を発見して共有できる講座の進め方をする。もう一つはグループ作りをするための、背中を後押しするような仕組み。また、行政、大学、NPO、地域、組織との交流については、場合によっては講師としてお話を頂いたり、現場に行ってお話を聞くなり、そういったことが必要なのではないか。現在の市民大学講座の中でそういったことはやられていることもそうでないものもあるが、市民大学講座自体は優れているので活かしながら新しいものを加えていくという考え方が必要なのではないか。現状には5つあげた要素を組み取られていない講座もあるので、組み入れていく努力も必要なのではないか。

会長：時間が来たようなので、今回はもう一度『「地域を育てる」のゴール』についてそれぞれの委員の意見を文章化して紹介していきたい。

#### <協議事項>

##### 1、2015年度生涯学習センター事業の企画について

(1) 市民企画講座「日本の音色—伝統楽器の世界」、「女性アーティストの眼、”いま”と”これから”」  
事務局：—資料1・2の説明—

辰巳委員から「取り組みの目的がともに「社会問題に対する意識を高めることができるよう、社会状況に応じたテーマの講座・講演会等を実施します。」となっています。広い意味ではそのようにも捉えられますが、むしろ文化活動の項目があれば、そちらに該当するのではないのでしょうか。こうしたものまで「社会問題に対する意識」としてしまうと、今、求められている「社会問題」が曖昧になる恐れがあるのではないのでしょうか。」と事前意見をいただいている。改めて生涯学習推進計画を見たところ、文化活動に対する項目は見当たらなかったため、今回は社会問題に対する意識として位置づけさせていただいた。

佐合委員からは「女性アーティストの眼、”いま”と”これから”」について、「各界の女性アーティストの話をそれぞれの視点から聞くことができるのはよい。事業内容④のどんな芽が出るのかな、というテーマは、総括と考えた場合、4番目でなく最後にして、4作家の話の総まとめ、総括としたほうがよいのではないか。」とご意見をいただいた。第4回目の内容はこの事業の総括内容ではなく、アーティストの取り組みが「芽が出るプロジェクト」という名称のため、「どんな芽がでるのかな」というタイトルにしている。

(意見・質問)

とくになし。

##### (2) 幼児の保護者のための講座

事務局：—資料3の説明—

(意見・質問)

会長：保育がいない参加者の割合はどのくらいになるか。

事務局：実際に応募が始まるまで、予想がつかない状況である。

##### (3) 昭和薬科大学共催市民講座「核医学って何?」、選挙管理委員会共催講演会「家庭でできる選挙のはなし」

事務局：—資料4・5の説明—

(意見・質問)

(意見・質問)

委員：「家庭でできる選挙のはなし」は平日昼間開催であるが、定員は埋まるのか。

事務局：選挙管理委員会との共催事業のため、日時の指定があった。定員については努力したい。また、選挙管理委員会から事前申込を行わず、当日直接会場に行く形式の要望があり、このような形式をとる。

委員：やはり、木曜日午後の開催に疑問を感じる。当事者である高校生の関心も非常に高く、中学生

も興味を持っている内容である。

委員：今回の変更は難しいと思うが、改めて選挙管理委員会にお伝えいただきたい。

事務局：協議会の意見を改めて選挙管理委員会にお伝えしたい。

委員：対象が保護者であるが、当事者たちに必要である。

委員：講師のプロ紙芝居師さるびあ亭か〜こ氏は、今までの実績がある方か。

事務局：町田市では選挙管理委員会の宣伝やイベントに出ている方である。

## 2、事業評価について

### (1) 市民企画講座「中高齢者のための安心ライフプラン」

事務局：－資料6の説明－

辰巳委員の事前意見は「受講希望者が多いということでは、シニアの方々のニーズを捉えていたのではないのでしょうか。今後こうした市民企画がどんどん出てくることに期待します。市民企画の講師交渉の方法を事前に十分説明しておくことが必要に思われます。市民企画のための講師の探し方、交渉の方法など文書にしておくともわかりやすいかもしれません。」といただいた。講師の探し方、交渉の方法については、手引きを作成してポイントをお伝えしていたが、職員ももっと具体的にわかりやすく説明すればよかったと思う点もある。

西原委員からは「市民企画講座の場合は、団体名を表記して欲しい。課題として取り上げていることについては『団体にはコーディネートスキルが乏しい』と云えるので、今後増えていく高齢者にとって必要な講座であるから、全ての市民企画講座に参画して下さる団体の基準を明確にして取組んで欲しい。」といただいた。団体名は、1つ目はNPO町田市民後見かわせみの会、2つ目は成年後見支援シートラストという団体である。「団体の基準を明確にして取組んで欲しい。」という点については、募集の段階では6点ほど基準を置き、なかには「集客を見込めること」、「社会的な課題や市民のニーズに合ったものであること」などがある。また、事前に全団体にヒアリングを行って決定している。佐合委員からも「定員をもっと増やすべきであろう。」という事前意見をいただいている。最終回では意見交流を入れたいこともあり、今回は定員を増やすのは難しかった。富川委員からも「2団体で協力しての開催で、難しい面もあったかと思うが、同じテーマに関心のある団体が繋がりを持てたことも一つの成果ではないかと思う。」と意見をいただいている。終了後に町田市のイベントである「まちカフェ」への参加を誘い合っている様子を見掛けた。参加者同士の繋がりが持てた事が一つの成果であると感じた。

(意見・質問)

会長：定員の問題があるが、45名定員を80名程にはできないのか。

事務局：今回は学習室1・2を使っているの、ホールを使えば定員を増やせる可能性はある。

### (2) コンサート「アコーディオンソロライブ～シャンソンとともに～」

事務局：－資料7の説明－

辰巳委員から事前意見で「キャンセル待ちのチケット配布により、空席なく聴きたい人に聞いてもらえたことはよかったのではないのでしょうか。この方法は今後も続けてください。」といただいている。引き続き、キャンセル待ちの対応は行っていく。また、西原委員からは「音楽を愉しめる状態にあると云うことは人々の心に余裕(感)があることを示している。それは日本が平和であることの象徴でもあるから、市域にも芸術・文化を愉しめる専用ホールが早く出来ることを期待する。」と意見をいただいている。佐合委員からは「アコーディオンでのコンサートということで、生涯学習センターのコンサート事業も市民の間でイベントとして定着し、かつ新規参加者が増えるという好循環になっている。」といただいた。また富川委員は「クラシックよりもコンサート初心者には入りやすいように思える。まだまだ無断欠席は多いが、キャンセル待ちのアナウンスなど、いろいろな方法を考えていただけて、空席を埋められているのは素晴らしいことだと思う。少数でもホームページの情報を活用している方がいらっしゃるならば、続けて欲しい。費用がかかるのでしょうか？」といただいている。町田市ホームページと広報まちだの掲載はセットで告知することになっているので、今後も続けて行く。

(意見・質問)

委員：7階ホールの定員は、何人なのか。

事務局：154人である。

(3) 町田地方史研究会共催講演会「晩年の徳川家康～没後400年」

事務局：—資料8の説明—

(意見・質問)

委員：この講座のように地域に密着したテーマの講座は、取り上げる地域で活躍する団体と共催することはできないのか。機会があれば協力すると言っている団体が実際にある。町田市の特性として文化財や地域の歴史も豊富なので、地域の団体とコラボレーションして実施していくのも手だと思う。

事務局：当センターは学習的な側面を支援する役割があり、社会教育法にも学習の相談が書かれているので、お話を受けて具体的に検討することは可能である。しかし、予算措置を伴うものについては、来年度以降に検討ということになる。また、市として地区協議会を積極的に支援する動きがあり、鶴川地区協議会から和光大学ポプリホール鶴川を活用したイベントの声掛けがあり、ブースを確保して定期的なイベントを現在実施している。他地域からの要望があれば積極的にお応えし、こちらからも地域に出て行く方法を模索している。他にも、玉川学園コミュニティーセンターから声掛けがあったが、条件が合わず実施できなかった。今後も各地域でこういった取り組みをやっていきたい。

委員：声掛けがあるまで待っているのではなく、職員が各地域に出向いて地域の様々な組織と繋がりを持つことが大切だと感じる。現状はそういった動きをしているのか。

センター長：現在市内では2015年11月時点で、8地区の地区協議会が設置され、地域のことは地域で解決していく取り組みを始めているところである。今回、鶴川地区協議会が暮らしの相談や子育て中のご家族向けのおもちゃ遊びや紙芝居、町田の歴史を学ぶ講座を行った。今後このような協力が多くなっていくと考えている。地域の実情を見ながらどういった事業展開ができるのか検討していきたいと考えている。

委員：必要性があったときにはフットワーク良く動いて欲しい。また、地域に出向き情報収集を行うことを奨励するようなセンターを作って欲しい。

委員：地区協議会などと連携し、市民大学の「地域を育てる」の部分を強化するような取り組みをうまくできないものか。

センター長：そういった点も含め、鶴川地区協議会での取り組みの良い所、修正すべきところを精査しながら、今後検討していきたい。

会長：定員について、120人は多いのか。ホールの154人定員に対し、120人設定にした点は理由があるのか。

事務局：共催する団体の枠として、30人を確保していた。

会長：その枠の人は人数に入っていないのか。

事務局：カウントできた分については、入れている。

会長：16人欠員がでたということになるか。キャンセル待ちの対応はできなかったのか。

事務局：今回は、当日参加者は1人だけであった。

会長：ぜひ、毎回キャンセル待ちの対応ができるよう体制をとっていただきたい。

<報告事項>

1、事業評価の最終報告

事務局：報告1～12について、資料のとおり報告する。

2、センター長報告

12月議会が実施される。詳細については、町田市ホームページをご覧ください。

### 3、町田市生涯学習審議会の議論について

答申を作成中である。ご意見があれば、ぜひお知らせいただきたい。

### 4、東京都公民館連絡協議会の活動について

#### ○委員部会について

委員：11月14日関東甲信越静岡ブロック研修大会兼東京都研究大会が実施された。

前半は神戸大学名誉教授の末本誠氏による「持続可能な社会づくりと、公民館の新たな可能性」をテーマに基調講演を行った。現在は持続しづらい社会であり現実をしっかりと捉えその中で価値観や生活態度の変革を考え、新しい人間関係や地域が抱える問題を行動に結び付けて行く、学校の外にあるものを捉えて行くという話があった。2点目として、センターはプラットホームを提供する場ということで、市民大学論を越え知識を与えるのではなく経験や知恵を出し合う場にすべきではないかということが話された。後半は、「都市社会教育、公民館実践の未来像」をテーマに国立市公民館の井口氏ほかによるパネルディスカッションを行った。7つのコンセプトを掲げているので、資料をご覧いただきたい。また、現状では公民館やセンターの来館者は限定的である。その壁を打破するためには今までと違うイメージアップを行う必要がある。職員像として、教員的な存在ではなく市民の中に入って行く姿勢が必要であり、コーディネーターとして全体の方向性やつながりを作っていく役割があることを認識してほしいという話があった。

9月の委員部会では「市民力を活かした公民館運営・事業の設定について」をテーマに小金井市、国立市、町田市の事例発表を行った。国立市からは具体的な地域の抱える問題を皆で取組んでいこうという取り組みが紹介された。また、町田市の発表として、市民大学、市民企画講座、センターまつりなどを紹介し、「現状の3課題の方向をさぐる」と掲げ、目標やビジョンを見える化して町田流のESDのメガネ、核になる市民と職員の人材づくり、市民企画の機会を更に与えることの3点が必要なのではないかと話した。

また、7月の研修会メモとして岡山市のESDの内容をまとめた。ここでは、岡山市の重点施策の中で講座中心から課題解決プロジェクトの事業展開を追及していくことが話された。1月30日に委員部会研修会として板橋区の事例発表を行う。他市事例との接触の良い機会であるので、ぜひ参加いただきたい。

### 4、その他報告事項

#### ○関東甲信越静岡ブロック研修大会兼東京都研究大会について

委員：私からはESDについて補足を行いたい。'80年代終わりごろ、ブルントラント・ノルウェー首相が中心となった国連の委員会で「Sustainable Development (持続可能な開発)」として、これまで型のハードな開発を続けては幾つ地球があっても足りないと話され、もう少し賢いライフスタイルや社会のあり方に転換していくべきであるということが提起された。その後、'92年の環境サミット開催時に、「Sustainable Development」が国連加盟国の合意事項となった。それが10年経っても定着しないということで、ヨハネスバーグで環境サミットが開催されたときに主要な課題となり、もっと教育のチャンネルを使い「Sustainable Development」という発想を地域に定着をしていくことが大切ではないかということが話された。その時私も参加したが、まずは環境庁と文部科学省に国連の重要課題である10年単位のプログラムをやってほしい、同じ扱いとして「持続可能な開発のための教育の10年」を提案して欲しいと提示をし、各国のNGOなどに対しても応援して欲しいと呼びかけた。数年後、「持続可能な開発のための教育 (ESD)」として10年間のプログラムが始まり、社会教育の分野では岡山市の公民館がモデル指定を受けた。岡山市では昨年10月でESDの10年が終わり、世界中から人が訪れ集会を行ったが、いまだに定着していないという難しさを感じる点もあった。基調講演を行った末本誠氏は市民大学に対して比較的否定的な見方をしているが、市民大学にしかできないことはたっぷりあり、社会が高度化していくなかで私たちの生活課題も情報を刷新しながら自分たちでものを考え行動して行くという価値は重要であると思うので、ご参考にさせていただきたい。

<その他>

○鶴川地区協議会との取り組みチラシの配布及び紹介

(意見・質問)

委員：中心になってこういった取り組みをやって行く人材がいなければできないと思う。南地域なども新しい人や子どもたちが増えてきているが、中心になりここまで作り上げる人がいれば地域が変わるのではないかと感じる。進んでいる地域とそうでない地域の差があり、なんとかならないのかと歯がゆい思いをしている。

委員：玉川学園などは社会福祉協議会が中心に取り組んでいる。1つのテーマ性や町内会、自治会との地縁関係の組織が上手い具合に噛み合わないといけないと思う。

委員：10月に鶴川地区協議会の開所式があったが、高齢者ホームを運営している方が事務局長を務め、福祉関係が非常に手厚い印象を受けた。そういったネットワークの上で自治会長や町内会長にお声掛けすれば、受けていただけるのではと思う。町田市でも色々な可能性があると感じる。

委員：去年立ち上がったばかりの地区なので、いくらでもやりようがあると思う。

会長：次回は12月18日金曜日14時～町田市生涯学習センター6階学習室2で開催する。